

佳作

テーマ1.. 医療と福祉、わたしの体験
「向日葵」

栃木県・佐野日本大学高等学校2年 坂野 未来

今年も、我が家に向日葵の花が飾られる季節になった。太陽のように明るくて元気をもらえる花。花が咲くような弟の笑顔によく似ていて、家族全員が大好きな花だ。

私の五歳年下の弟は、珍しい染色体異常を持って生まれた。未熟児で心疾患を持ち、遠くの大学病院で生まれ、NICUで命を助けていた。ガラス越しに見る小さな弟に早く直接会いたいと、退院を心待ちにしていたことを昨日のことのように覚えている。

自宅で、家族皆で暮らしたいという両親の強い希望から、大学病院と地元の総合病院の支援により在宅医療を受け、弟の体調が良いときはリハビリや通園センターにも通い、友達や園の職員の方々と楽しく過ごせていた。私も弟のリハビリの応援や園の行事に参加をして、家とは違う弟の様子を見ることが楽しみだった。弟はいたずら好きでよく笑う、大きな赤ちゃんのようなかわいい男の子だった。

しかし、弟は体が弱く、心臓や消化器、気管切開の手術や喘息の治療のため、入院が頻繁だった。母が泊りで入院に付き添い、私の生活も激変した。病棟に小学生は入室できず、私だけ入院中の弟に会わせてもらえない。

弟の主治医の先生が、姉である私も気にかけてくださり、ある長期入院中の手術の際、病棟から手術室まで向かうタイミングで、私は久しぶりに弟に会わせてもらえることになった。母に抱かれた弟は機嫌が良く、これから手術だというのに無邪気に笑っていた。私の方が緊張をしていたのかもしれない。手術室の入り口で執刀医の先生に「弟を治してください。お願いします。」と、私は涙を堪えてお願いをした。手術に向かう弟を抱っこした先生が、「お姉ちゃん、任せて。」と私に優しく微笑み、安心

させてくれた。

このときからだろうか、弟を救ってくれる医師や看護師は私にとつての憧れ、尊敬するヒーローになった。待合室で待っている私に気が付いて声をかけてくれたこと。弟の体調が良い時にガラス越しに会わせてくれたこと。私にも理解できるように弟の体のことを教えてくれたこと。ヒーローたちは弟や両親だけでなく、私にも寄り添ってくれたのだ。私も家族の一員なのだと、とても嬉しかった。

弟が六歳を迎えたある夏の日、家族の日常は終わりを告げた。夜中に弟の心拍と呼吸、酸素値のモニターの警告音が鳴りやまず、地元の総合病院に運び込まれた。小児科医が同乗し、大学病院に救急搬送された。二日後、母の目の前で弟は心臓を止めてしまったのだ。すぐ当直の先生が駆け付け、弟に心臓マッサージをし、PICUで治療が始まった。院内の医師が集められ、何人もの先生方が交代で青いスクラブを紺色に染めて、必死に蘇生しようと努力してくれたと、両親伝手に聞いている。弟は両親の腕の中で立っっていた。

私は連絡を受け、祖父母と大学病院に駆け付けた。このとき初めてPICUへの入室を許された。モニターや機械が多く並ぶ横をすり抜けて、一番奥の部屋に通された。弟はまるで眠っているようだった。私は泣きながら弟の清拭を手伝った。病院側の配慮で私の到着を待っていてくれたのだ。多くの先生方や職員の方が弟にお別れの挨拶をしてくれた。私も向日葵に囲まれた弟とお別れをした。

今年は、弟の七回忌法要の節目の年だ。弟の遺影が、あの夏と同じように向日葵の花に囲まれた。弟を治したいと憧れた医師になるという夢は今でも変わっていない。大学見学で医療体験をする機会があり、心臓マッサージの大変さも経験し、感謝の気持ち溢れた。簡単に叶えられる夢ではないことも身に染みている。それでも私は、患者さんだけではなく、ご家族にも寄り添える医師になりたい。私はこれからも努力を続けるつもりだ。弟の遺影と向日葵に誓った、いつかきっと、あなたたちみたいな子供を助けられるヒーローになるからね、という約束を叶えるために。